調和的可能性
Harmonic Possibility

山下 大貴
Hiroki Yamashita
独立研究者

E-mail: sintouatu1@gmail.com

抄録
本稿は、破綻や失敗を含みながらも世界が完全な断絶に至らず、なお語られ続けているという事実を、存在論的条件として問い直す。経験的仮説や規範的原理を提示するのではなく、世界を最終化しようとする思考が、世界と記述の関係に固有の構造条件によって必然的に失敗することを示す。この構造を本稿は「調和的可能性」と呼び、最終化の失敗から生起する問いを、心理的態度ではなく世界構造の帰結として位置づける。以上を通じて、本稿は存在論が成立していること自体の条件を示し、節約的な条件的存在論を提示する。

Abstract
This paper reexamines the fact that the world, despite its breakdowns and failures, does not reach a complete rupture and continues to be spoken of as an ontological condition. Rather than presenting empirical hypotheses or normative principles, it shows that thought attempting to finalize the world inevitably fails due to structural conditions inherent in the relationship between the world and description. This paper calls this structure "Harmonic Possibility" and positions the questions that arise from the failure of finalization as consequences of the world's structure rather than psychological attitudes. Through these, this paper presents a parsimonious conditional ontology that shows the conditions for ontology itself to be valid.

方法的前提
本稿は経験的仮説を提出しない。また、規範的原理を導出しない。本稿の目的は、世界についての記述や理論が成立しているという事実そのものを問いに付すことである。方法的に本稿が行うのは、世界を最終化しようとするあらゆる思考が、どこで、どのような仕方で構造的に破綻せざるをえないかを条件的に示すことである。したがって本稿は、説明や正当化を目指すのではなく、成立条件の限定を通じて、思考の射程と限界を同時に明示する。

問題設定
世界は不可逆的変化や局所的破綻を含みながらも、完全な断絶や沈黙には至らず、なお語られ、理解され、実践され続けている。この事実は、単なる偶然や人間的努力の結果として片づけられるべきではない。むしろ、世界が成立しているための最小構造条件として問われねばならない。本稿の問いは、なぜ世界は破綻しうるのに、破綻だけにはならないのか、という一点に集約される。

調和的可能性
本稿は、この構造を「調和的可能性」と呼ぶ。調和的可能性とは、世界が調和へ収束することや、秩序が最終的に回復されることを意味しない。それは、破綻や失敗を含みながらも、世界が一方向的に閉じてしまわないという事実を記述するための概念である。調和的可能性は、出来事・崩壊・緩和・再編といった語彙と結びつき、世界が出来事として経験される水準において、関係や意味が断絶しない理由を示す。

世界の最終化とその失敗

世界を理解し、説明し、秩序づけようとする思考は、しばしば世界を最終化しようとする。最終化とは、ある記述や判断をもって世界を完了させ、これ以上の問いや更新の余地を排除する操作である。

本稿において「世界を最終化しようとする思考が必然的に失敗する条件」とは、世界が出来事的に生成し続け、記述の枠組み自体が世界の内部で更新され、いかなる確定も単一の完成像へと収束しえないという、世界と記述の関係がもつ構造条件を指す。

本稿は、こうした最終化の試みが原理的に成功しえないことを示している。

世界は非収束的であり、状態や意味が一つの最終形に固定されることはない。さらに、世界を記述するための枠組みそれ自体が、出来事や関係の生成に応じて更新される。したがって、最終化は常に過剰であり、その過剰は必ず失敗として現れる。

ここでいう最終化の失敗とは、世界が完全には閉じられないという意味であり、局所的・一時的な閉鎖や固定が生じないことを意味しない。

失敗の残余としての問い

世界の最終化が失敗するたびに、必ず何かが残る。それが問いである。最終化の失敗が沈黙ではなく問いとして現れるのは、その失敗が世界の消滅ではなく、世界がなお生成し続けているという事実の露出だからである。ここでいう問いとは、特定の答えを求める問題ではなく、世界がなお確定されていないものとして立ち現れているという事実の表れである。問いは意図的に生み出されるのではなく、最終化の失敗によって不可避的に生起し、本稿では心理的態度ではなく世界構造の帰結として位置づけられる。

問いが消去されずに立ち上がり続けるという事実そのものが、世界についてのいかなる記述も完全には最終化されえないことを示しており、この点において問いは存在論が成立してしまう条件として機能している。

存在論的帰結

本稿の立場は、ハイデガー的な開示論や生成論と近接しつつも、世界の非完結性を存在の様態として主張するのではなく、世界を最終化しようとする思考が必然的に破綻する条件として記述する点に独自性がある。すなわち本稿は、存在がいかにあるかではなく、存在論が成立してしまうこと自体の条件を問題にする。

本稿は既存の存在論や生成論と近接しつつも、主体・言語・歴史のいずれにも還元せず、世界を最終化しようとする思考が必然的に失敗する条件そのものを記述する点に独自性がある。

以上から、本稿が提示する存在論は、存在者の一覧や最小単位を与えるものではない。それは、存在論が成立していること自体を可能にしている条件を示す条件的存在論である。世界がなお語られ、理解され、実践されているという事実は、世界が閉じられない構造をもっていることの帰結である。調和的可能性とは、この閉じられなさに与えられた名前である。

結論

本稿は、新しい問いの置き方として、存在論が成立していること自体を問題にするための最小構造を与えた。世界は完成されず、最終化されない。その失敗の反復の中で、問いは消去されることなく立ち上がり続ける。調和的可能性とは、この事実を否定することなく引き受けるための、節約的な存在論的枠組みである。

付論：哲学的含意

本稿の立場は、ニヒリズムでも相対主義でもない。意味や価値を否定するのではなく、それらが最終的に固定されえないことを示すからである。また、本稿は実践的含意を欠くわけでもない。実践とは、正解を適用することではなく、問いが失われない条件を破壊しないことである。この意味

で、本稿が与えるのは行為規則ではなく、行為が超えてはならない存在論的線引きである。
本稿が示す制約は、「かく行為すべきだ」という規範ではなく、「ある種の行為や判断が、世界を閉じる操作へと転化したときに必然的に破綻する」という存在論的事実の記述である。
本稿が示した条件的存在論は、倫理・知能・研究実践といった領域に対して、共通の制約を与える。すなわち、それらが世界を閉じる操作へと転化する地点を可視化するという制約である。調和的可能性とは、世界がなお語られているという事実そのものの別名であり、この事実を消去しようとする思考が必然的に失敗することを示す点に、本稿の哲学的意義がある。

Arendt, Hannah. On Violence. Harcourt, 1970.
Deleuze, Gilles. Difference and Repetition. Columbia University Press, 1994.
Derrida, Jacques. Of Grammatology. Johns Hopkins University Press, 1976.
Derrida, Jacques. Writing and Difference. University of Chicago Press, 1978.
Foucault, Michel. The Archaeology of Knowledge. Pantheon Books, 1972.
Heidegger, Martin. Being and Time. Trans. John Macquarrie and Edward Robinson. Harper & Row, 1962.
Heidegger, Martin. The Question Concerning Technology and Other Essays. Harper & Row, 1977.
Quine, W. V. O. Word and Object. MIT Press, 1960.
Sellars, Wilfrid. Empiricism and the Philosophy of Mind. Harvard University Press, 1997.
Whitehead, Alfred North. Process and Reality. Free Press, 1978.
木田元『ハイデガーの思想』岩波書店、1993年
野家啓一『物語の哲学』岩波書店、2005年
中村雄二郎『共通感覚論』岩波書店、2000年